

氏名(本籍)	ほん 洪	さん 思	まん 満	(韓 国)
学位の種類	文学博士			
学位記番号	博乙第554号			
学位授与年月日	平成元年12月31日			
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当			
審査研究科	文芸・言語研究科			
学位論文題目	現代韓国語の特殊助詞の研究 ——日本語の副助詞との対比を中心に——			
主査	筑波大学教授	文学博士	北原保雄	
副査	筑波大学教授	文学博士	小松英雄	
副査	筑波大学教授		芳賀純	
副査	元筑波大学教授	文学博士	馬淵和夫	

論 文 の 要 旨

本論文は、韓国語の「特殊助詞」について統辞論的、意味論的に考察したものであり、対照文法的な見地から日本語の対応形態である副助詞と比較対照し、両者の同質性と異質性とを解明することによって、その文法論的、意味論的性格を明らかにしようとしたものである。全体は、Ⅰ「序論」、Ⅱ「分布・文法機能の対比」、Ⅲ「意味機能の対比」、Ⅳ「結論」の4章から構成されている。

まず、第Ⅰ章「序論」では、1. 研究の目的と方向と、2. 名称・範疇・下位区分とが述べられる。

第Ⅱ章「分布・文法機能の対比」では「特殊(副)助詞」(韓国語の「特殊助詞」と日本語の「副助詞」を総称する場合、この表記による)の接続する語(被接語)はどのようなものであるか、格助詞(格標識)との接続にはどのような特徴や制約があるか(以上分布)、特殊(副)助詞の文法機能は何であるか(文法機能)などの問題が、特殊助詞を中心として副助詞を対比させながら論じられる。この章は、5節から構成される。

第1節「連結の様態」は、被接語についての考察である。体言、用言、副詞などの場合に分けて、日韓両言語を対比しながら詳細に記述している。

第2節「複合配列の様態」は、特殊(副)助詞と他の助詞との接続についての考察である。特殊(副)助詞は、他の特殊(副)助詞と接続したり、格助詞に前接したり後接したりで、その接続の様態は複雑である。その実態を、韓国語の場合と日本語の場合とに分け、詳細に記述する。ここで、韓国語のB類特殊助詞(日本語の狭義の副助詞に相当)は、日本語の副助詞と同様に格助詞に前接するが、それは {k a} 主格、{+ i} 冠形格、{l + l} 対格の助詞の場合だけに限られ、日本語の「だけに」「ばかりへ」などに相当するような接続はないという指摘がなされる。そして、韓国語の {l

+l} は、他のいわゆる副詞助詞 {e} {e k e} {l o} {w a} などとは明確に区別されなければならない点で、日本語の {を} とはかなり違った性質を有するものであること、{が} {を} {に} などのいわゆる強展叙の助詞が省略されやすいのは、その弱標識性（語彙的意味の弱い構文的助詞であるという性質）によるものであることが論じられる。

第3節「副詞的連用修飾の機能」では、1. 格助詞との接続関係、2. 用言の活用形との接続関係、3. 通時的・語源的形態、4. 副詞に転成する機能の4点から、特殊（副）助詞が副詞的連用修飾の機能を有するものであることの検証が行われる。両言語を対比して考察した結果が5頁目にまとめられている。

第4節「格との無関係性」は、1. 特殊（副）助詞がいろいろの格の位置に通用されること、しかし、それは特殊（副）助詞が格を標示するものであるからではないこと、2. 特殊助詞が格標識と接続する様相、3. 格標識は削除されることがあるが、零形態でもその格機能は認められることなどを、多くの具体例をあげて考察し、特殊（副）助詞が格機能とは無関係であることを論じている。

第5節「接尾辞との相異」では、B類の特殊（副）助詞と名詞類の接尾辞との範疇上の判別問題が論じられる。1. 内的統合の様相、2. 外的統合の様相、3. 連体修飾構造の形成、4. 語彙的資質の指定・変異、5. 非慣用化の制約、6. 加意性、7. 格標識との交渉などの面から考察し、統合構成、意味構造、統辞構造の三つの観点から両者の機能の差異を整理して結論としている。

第3章「意味機能の対比」では、主として語用論の立場から個々の特殊（副）助詞の語彙的、文脈的、状況的意味を分析し、特に前提と含意の分析により意味の依存関係を考察して、各助詞の相互間における類義関係と推移関係を究明しようとしている。この章は全6節から構成される。

第1節「下位分類」は、日韓両国における従来の文法論で特殊（副）助詞がどのように分類されているかを調べ整理して、以下の考察の出発点としたものである。

第2節「助詞 {n+n} と {は} との対比」は、1. 話題提示、2. 対照表示の二点から、先行研究をきめ細かく分析整理して詳論したものである。「一般的に、特殊（副）助詞は統辞的機能のないものであるのに反して、{n+n(は)} は話題語としての統辞性を持っていると言う点で、ほかの特殊（副）助詞とは非常に異質的である」、「‘話題’の機能は‘対照’の意味より優先視される。即ち、‘対照’の意味がないから‘話題’が現れるのではなく、‘話題’として提示されることによって‘対照’が消滅するのである」などの結論が提示される。

第3節「助詞 {to} と {も} との対比」は、1. 同類指示、2. 極端例示、3. 譲歩・許容表示などの点から論じられる。助詞 {to(も)} の中心的意味は亦同 (also) で、提示した事実内容と同類（同一、類似）のものがもっと存在することを示すと結論し、助詞 {to} の意義素から派生する種々の意味は他の特殊助詞とも部分的な類義関係を形成するとして、この関係を図で示している。

第4節「助詞 {man} と {だけ} との対比」では、1. 唯一限定、2. 程度の縮小制限、3. 強調的添意の三点から、{man} と {だけ} の共通点・相異点が究明され、さらに、4. {man} の形成する慣用句について詳細な考察が展開される。{man} の方が {だけ} よりも感嘆助詞的性格が強いということや、格助詞に前接する場合と後接する場合との意味の違いなどが詳細に論じられる。

第5節「助詞 {kkaci} {cocha} {mace} と {まで} {さえ} との対比」は、1. 語源的意味（極端、限界、終結）、2. 意味依存関係の分析、3. 極端例示の論理的構造の三項目に分けて論じられる。{kkaci} {cocha} {mace} の三者の意味が相互に重なる部分をもちながらも（添加の意味の面では {to} とも重なる）、それぞれに独自の領域を有するというのが、前提・断言・主張・含意の比較や、極端なものを例示する論理構造の面から考察されている。

第6節「助詞 {na} {lato} {nama} {nt+l} {t+nci} と {でも} との対比」は、1. {na} の多義性、2. {lato} の類義関係、3. {nama} の類義関係、4. {nt+l} の類義関係、5. {t+nci} の類義関係について論じられる。韓国語の五つの助詞は、日本語ではほぼ「でも」一語が対応するように類義的なものであるが、それらの部分的な類義性と異質性が考究される。他の助詞との類義関係が最も複雑なのが {lato} で、次に複雑なのが {na} と {nama}, {t+nci} であり、{nt+l} は {lato} としか類義関係をもたない、そして、類義関係を多くもつ助詞ほど使用頻度が高くなる、と結論している。

第IV章「結論」は、本論文において得られた結論を、都合61項目の箇条にまとめて示したものである。

審 査 の 要 旨

韓国語と日本語の文法構造は、きわめて近似している。したがって両言語は、その対応する文法要素を比較対照して考察するのに適しているし、考察しやすい関係にあるということが出来る。対応する文法形態を対照的に考察することによって、一方の言語だけを個別的に研究しては気づかれなかったことが発見されることもある。

日本語の副助詞に相当するものは韓国語では特殊助詞とされ、両者は、その接続の様相、文法機能、意味などの上で、共通するところが多い。

本論文は、上述の事実の上に立って、韓国語の特殊助詞について、日本語の副助詞との対比を中心に、総合的にまた個別的に詳しく考究したものである。まず第一に、両国におけるこの方面に関する従来の研究を広く集め緻密に分析し再整理して総合するという方法を取っていることが高く評価される。先行の業績の多いこの方面の研究においては、自己の分析結果、それに基づくところの自己の見解のみを独断的に述べることは、旧説を再説することになったり、誤謬を犯す結果になったりしかねない。本論文は、特殊（副）助詞そのものの研究だけではなく、日韓両国で樹立された文法理論体系を対比して両言語の文法記述と研究方法を連合もしくは補完することを、目的としているのである。

一方、従来の諸説についての検討や、新しく提唱しようとする自説についての論証は、多くの例文をかかげて、きわめて具体的であり、記述的な方法が徹底している。多くの具体例をあげてきめ細かな観察を行い、その上に立って立論がなされていることが、高く評価される第二点である。第三に、類義関係にある特殊助詞をいろいろの基準によって分析し整理して、その類義関係と推移関係を解明したことも、本論文の大きな成果である。

本論文によって新しく提示された見解は他にも少なくない。論文要旨の項にも二三指摘したが、日本語では {を} の後に副助詞が接続できるが、韓国語では {l+1} の後に特殊助詞は接続しないということの指摘、およびそれに対する解釈、特殊助詞は主格、冠形格、対格の助詞に接続する時には必ず前接し、副詞格の助詞に接続する時には後接するということの指摘、およびなぜそうなるかについての解釈、日本語の副助詞はその大部分が体言（形式名詞）からできてもので体言的な機能が著しいのに対して、韓国語の特殊助詞は用言の副詞形語尾が虚辞化してできたものが多いので副詞的機能がより著しいという論、強展叙の助詞の無形化についての新しい解釈、{man} と {だけ} との相違についての論、などである。

ただ、本論文は、日韓両国において、それぞれどのように文法記述が行われているか、それにはどういう問題点があるかということの究明に力点がおかれているために、特殊助詞と副助詞の対照的研究そのものがもう一つ徹底してないうらみがある。

しかし、本論文は、特殊（副）助詞を包括的にまた個別的に考察の対象とし、従来の研究を広く深く検討しその上に新しい言語理論を導入してきわめて緻密に論を展開したものであり、この分野における最初の本格的な研究と評してよく、現時点において期待しうる特殊（副）助詞研究の最高の達成を示しているものである。

よって著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。